

こどもの成長と絵本

斎 藤 惇 夫

本編は令和6年10月23日（土）に開催された文化講演会の生の講演録を元に、読みやすく編集し直したものである。実際の会場では演台に積まれた本を片手に話される場面がある。内容については講演録に忠実に再現したが、文章として読みやすくするために口語表現を適宜改編した。また、書名や参考文献が多数登場する。それらの詳細な情報は編集者が脚注に示している。（責任編集 森木朋佳）

はじめに

「それではこれから、演題にあります『こどもの成長と絵本』というテーマで、みなさんにお話ししたいと思っています」という出だしで始めるつもりでしたが、みなさんご存知のように、10日ほど前に、中川李枝子さんがお亡くなりになりました。今、中川さんの死ということを書きましたけれども、今年の3月に中川さんがいわゆる施設にお入りになったということを私は聞いていて、その方が気楽でいらっしゃるだろうなと思っていましたが、先日の訃報でした。

中川李枝子さんとの思い出

実は私がNEC関係のある電気会社で仕事を続けておりましたときに、仕事にミスがありました。等間隔で潜水艦に対して爆弾を落とすというシステムがあり、それを輸入する仕事をしていましたが、それが上手くいかなくて、どうも防衛庁の方々がみんな怒り出したようです。わが社に一体責任者は誰だということになりまして、直接の担当だった私が「私が担当していました」と言ったところ、大変怒られました。会社の上司にも怒られ、それで銀座をうろうろとしていましたところ、そこには

教文館という本屋さんがあります。今はそこに「ナルニア」という素敵な子どもの本の専門店が入っていますが、当時は普通の本屋さんでした。本屋さんを覗いていましたら、子どもの頃から好きだった子どもの本がずらりと並んでいまして、その中に2冊、新刊と思うようなものがあったものですから、つい手に取って読み始めました。1冊は翻訳物で、大変面白い、今でもやっぱり翻訳物で心躍らすものがあるのだと思い感動いたしました。それは『エルマーのぼうけん』⁽¹⁾でした。もう1冊は、挿絵はへたくそ、活字の組み方も素人っぽい、本自体の装丁もさえないくて、でもまあ新刊だから読んでみようと思い読んでみたら、それが驚きでした。こんなに明るくて、こんなに論理的で、こんなに子どもの世界を情緒的にはなくて正確に、子どもにもわかる言葉、躍動的な言葉、正確な言葉でもって書かれている作品が日本にもいよいよ登場したのかという驚きに駆られました。著者を見ると中川李枝子と書いてあります。もう僕は、電気会社なんか勤めてはいられないと思い、早速翌日に辞表を出しまして、なんとなく子どもの本の世界に進もうと決意していました。そういう衝動を与えてくださったのが、中川さんの『いやいやえん』⁽²⁾ だったのです。

「岩波少年文庫」の時代

それからいろいろなことを経て、直接石井桃子さんのところに伺って、どうしても子どもの本の編集がやりたいとお伝えしました。石井さんが、60代の中程でいらしたと思いますけれども、まじまじと私をごらんになって、「あなた様は岩波になさる、それとも福音館になさる」とお聞きになったのです。えっと思っていましたら、「ちょっとお待ちになってね」とおっしゃって、5分ほど待っていましたら、また玄関先に現れて、「今、福音館の編集長の松居さんという方に電話したから、明日福音館に顔を出してみてください」とおっしゃいました。その翌日顔を出しましたら、松居直氏が出てきて、「いつから来ますか」とおっしゃるので、「えっ」と思っていましたら、「でも、一応簡単に入社を決

(1) ルース・スタイルス・ガネット作 / 渡辺茂夫訳 / ルース・クリスマン・ガネット絵 1963年『エルマーのぼうけん』福音館書店

(2) 中川李枝子作 / 大村百合子絵 1962年『いやいやえん』福音館書店

めてはいけないうから、面接らしいことをしておきますけれど、最近読んだ子どもの本の中で、特におもしろいって思った本があったら、おっしゃってください」と言われました。「はい、『エルマーのぼうけん』と『いやいやえん』です」と申し上げたら、「それで十分です、じゃあ明日から来てください」となりまして、それから福音館書店で編集の仕事をするようになりました。

1 番最初に編集したのが、中川李枝子さんの『らいおんみどりの日ようび』⁽³⁾ という本でした。そこで中川さんとお話ししているうちに、中川さん自身も、「岩波少年文庫」にいたく熱を上げて、ずっと少年文庫で育ってきたということを知ります。実は私自身も全く同じ経験を持っています、ただし中川李枝子さん、私よりも5歳年上で、つまり1935年生まれでいらっしゃる。中川さんの世代には、みなさんよくご存知の方では大江健三郎、それから小沢征爾がいます。あの方々の共通経験は小学校の高学年のときに戦争が終わり、その時に昨日まで軍事教育、日本の戦いは正しいと言い続けていた教師が、あっという間に民主主義教育を始め、民主主義を昔から自分は守り続けていたというような口調でもって語り始めるという大人の大変身を見てしまうわけですね。それで、大人は信じられないという経験を共通して持っていくことになります。その時に、その信じられない大人をどうやってもう一度信じ直すかというところに、中川李枝子さんの前に現れたのが、「岩波少年文庫」だったわけです。その当時、彼女の御一家は仙台に住んでいらして、お父さんが東京に行かれた時に、少年文庫の新しいものを買って家に持って帰ったそうです。それを1冊1冊読みながら、きょうだい妹の百合子さんと奪い合うようにして読みながら、世界中の大人の中には絶対信頼できる人たちがいる、それにも増して世界中には面白いものがある、その物語を読むことによって世界中の子どもたちが救われるということを、本当に深く経験していくわけです。非常にダイナミックなことが、そこで起こっていた。例えばみなさんは、1番最初に配本された「岩波少年文庫」は、『ふたりのロツテ』⁽⁴⁾ から始まって、それから『あしな

(3) 中川李枝子作／山脇百合子絵 1969年『らいおんみどりの日ようび』福音館書店

(4) エーリヒ・ケストナー作／高橋健二訳 1950年『ふたりのロツテ』岩波書店〈岩波少年文庫〉

がおじさん』⁽⁵⁾、あと二つあるのですが、そういうものであったことを思い出していなければ、どんな衝撃が子どもたちの心の中に生じたかということをお分かりいただけるのではなからうかと思います。

その同じような経験を私は少し後になってからします。「岩波少年文庫」が発行されたのが1950年ですから、実は1950年、朝鮮戦争が始まった年です。子どもたちは、私自身も1950年に10歳になっていたのですが、あれほど怖かった戦争がやっと終わったと思ったのも束の間、お隣の国で戦争が始まってしまった。その恐怖が押し寄せてきたわけです。少年文庫を読んで、いやいや、平和を守ろうとする人たちの方が多いことを一所懸命感じて生きていこうとした、そういった支えがあったのですが、その5年年上に中川李枝子さんたちがいらしたのです。そんなことを中川さんのところに初めて伺ったときに語り合うことから私の編集者生活というものが始まりました。ですから、李枝子さんが私にとっては、実の姉のような感じの方で、亡くなられたってことはやっぱり、私にとって一つの大変大きな損失という思いがしてなりません。

中川さんのことをこのように思っていたら、中川さんも石井さんも本当に戦後の輝ける時代の指導者であったことを思い出しました。それならば瀬田貞二さんについてお話ししようと、瀬田さんについて、何か瀬田貞二さんという人の横顔だけでも私をご紹介できたらと思い、今日は参りました。もちろんその中で、瀬田さんが（今回のテーマである）「子どもの成長と絵本」についていろいろ語っていらっしゃることもありますので、本をとおしてご紹介できたらと思っているのですけれども、メインテーマは瀬田貞二さんの眼差しというところでもって、今日はお話したいと思います。

瀬田貞二さんのこと

瀬田さんは、1916年にお生まれになり、1979年にお亡くなりになりました。63歳でいらっしゃいました。随分若くしてお亡くなりになったと改めて思いますけれども、その間、みなさんもうよくご存じの石井桃子さんと瀬田貞二さんお二人で、日本の子どもの絵本の世界にどうい

(5) ジーン・ウェブスター作 / 谷口由美子訳 1950年『あしながおじさん』岩波書店〈岩波少年文庫〉

とをなさったのか、それがどんなに大きな衝撃的なことであったかということについて、今一度少しだけ振り返ってみたい。特に先生の細かい業績というよりは、私自身に与えた影響、私自身がそれによって子どもの本の編集者になり、書き手にもなっていったということを、どうしてもこの講演でお伝えしたいと、中川さんの死を前にして思ったのです。

私自身は今申し上げたように、1940年生まれですが、瀬田さんよりも24歳年下ということになります。ついでに申し上げますと、石井桃子さんが1907年生まれです。あるいはあと、赤羽末吉さんは1910年生まれでいらっしゃる。そのあたりの方々を思ってくださいなのですが、24歳年上の瀬田貞二大先生に対して、本当は先生とお呼びするのが礼儀なのでしょうけれども、瀬田さんっていう方はあらゆる方々に対して、「さん」付でお呼びになる方だったんです。徹頭徹尾、組織だとか、あるいは組織にまつわる上下関係というものを毛嫌いする方で、いつも対等な関係として誰に対しても「さん」付でお呼びになりました。軍隊の生活でも、そういうことをなさっていらしたようです。

私が編集者だった頃、お正月にはよく瀬田家を訪れました。みなさんよくご存知でいらっしゃると思います、絵描きさんの瀬川康夫さんだとか、堀内誠一さんだとか、それから梶山俊夫さんだとか、詩人で翻訳者であった矢川澄子さんだとか、岩波の編集者であったいぬいとみこさんだとか、あるいは翻訳者の内田莉沙子さんもいらっしゃいましたね。つまり、錚々たるメンバーが集まって、酒宴を開いていました。そのとき、瀬田さんは必ずみなさんのことを、みな10歳以上年下ですが、「さん」付で呼ばれていました。さらにその方々よりも10歳年下の人に対しても、「斎藤さん」とお呼びになるのですよね。「斎藤さん」と呼ばれますと、いつも瀬田さんと同じ熱量でもって、あるいは同じ思いで子どもと子どもの文学に向き合うようにとされているような感じがどうしてもしまして、私は大変重荷を感じておりました。編集者だった頃はもちろん、瀬田先生とお呼びしてなんとなくお茶を濁しておりました。

今申し上げた方々はみなさん、「瀬田さん」とやはり「さん」付けで呼ばれていました。しかし、今になって考えてみると、さっき司会の河野先生がおっしゃってくださったように、私はもう84歳です。瀬田さんは63歳で亡くなられたので、私はもう20歳も年上になっております。瀬田

先生と言うのも憚るような年齢になったことは、自覚しなければならないと思います。

よく幼稚園の子どもたちが、今私は幼稚園の園長もしているものから、尋ねられることがあります。私の顔を見ると子どもたちが「えんちょうって、ようちえんになにしにきてるの」って。本当に不思議に思うようです。自分のお父さんはだいたい朝早く背広を着て東京に仕事に行く、園長はなんだか遊び人のスタイルでやってきて、1日中自分たちと遊んでいる。昨日はここに来るために、2時ごろ幼稚園を出たのですが、そのときに幼稚園の子どもたちに見つかって、「きょうはおしごとあってよかったね」って。なんか着る物で判断されているような感じがしますが。とにかく今日は、瀬田さんを「瀬田さん」と呼びながら、お話をさせていただきたいと思っております。

瀬田貞二さんの仕事

私が住んでおります、さいたま市の中央の駅は、もちろんさいたま駅であるわけですが、その東側に PARCO の建物がありまして、その8階が浦和市中央図書館になっています。その図書館に行きますと、石井桃子さんと瀬田貞二さんの本の全てが並んでいる、石井さんはもちろん浦和生まれでいらっしゃいます。それから瀬田さんは、ずっと住み続けていらっしゃったということもあります。浦和という町がお二人にとりまして大変親しい町であるのですが、創作やエッセイや評論だけでなく、お二人が編集なさった本もほぼ全部と言っていいほど備えられています。鹿児島からは随分遠いのですが、もし何か機会があったら、東京にでもいらっしゃることがあったら、そこから電車なら45分ほどで来ることができますので、一度覗いてみていただきたいと思います。

みなさんが驚かれると思いますのは、石井さんが翻訳なさった本、書いた本、エッセイ、編集なさった本、瀬田さんがお書きになった本、評論集、それから翻訳なさった本、編集なさった本のほとんどが、今でも生きて残っているということです。やっぱり日本では、いろんな本が出てはすぐ消えていく、だいたい子どもの本の世界では、初版を出してそれで終わりになってしまうというのがほとんどですよ。そういう、なかなか文化が根付かないような国では珍しいことだと思います。それだ

け子どもたちにとって本当に大切なものを、子どもたちがもう1回読んでよと言いたくなるような本、あるいは先生方が、図書館員が、どうしても子どもたちに読み続けて欲しい本というものを、お二人は懸命になってお出しになったとみなさん感じ入ると思います。

瀬田貞二さんに関しましては、今日お集まりになったみなさんはだいたい子どもの本に強い興味を持っていらっしゃる方だと思いますので、目を通された本が多いだろうと思います。まず絵本では、昔話の『かさじぞう』⁽⁶⁾ だとか『スーホの白い馬』⁽⁷⁾ だとかいろいろありますよね。みなさんがよくご存知のとおりです。翻訳では、『三びきのやぎのがらがらどん』⁽⁸⁾ 『チムとゆうかなせんちょうさん』⁽⁹⁾ 『ねむりひめ』⁽¹⁰⁾ 『よあけ』⁽¹¹⁾。どの本も名訳だと思いますし、そして子どもたちにとっては、例えばわが幼稚園にとっては毎日だけれが、先生に読んでもらっている本という言い方が1番いいと思います。例えば『三びきのやぎのがらがらどん』、私が持ってきている絵本は、これはちょうど2000年に重版されたものですが、そこで第111刷と書いてあります。今はもう200刷近いと思いますが、どれだけたくさん「がらがらどん」が子どもたちの手に渡っているかということです。どの本もだいたいそうなんですが、中川李枝子さんの『ぐりとぐら』⁽¹²⁾ は2000万部刷ったそうですね。『ピーターラビット（のおはなし）』⁽¹³⁾ も3000万冊ぐらい売れているのではないのでしょうか。そう思うとものすごい数の本が子どもたちの手元にいっています。よく3代続いたものでないと子どもの本とはいえないと言われていますが、どの本も、それに近い刷り部数をほこっていると言えいいでしょう。

ファンタジーと『子どもと文学』

こういった翻訳の絵本と同時に、瀬田さんには高学年の子どもたちの

(6) 瀬田貞二再話／赤羽末吉画 1966年『かさじぞう』福音館書店

(7) 大塚勇三再話／赤羽末吉画 1967年『スーホの白い馬』福音館書店

(8) マーシャ・ブラウン絵／瀬田貞二訳 1965年『三びきのやぎのがらがらどん』福音館書店

(9) エドワード・アーディゾーニ作／瀬田貞二訳 2001年『チムとゆうかなせんちょうさん』

(10) グリム作／フェリクス・ホフマン絵／瀬田貞二訳 1963年『ねむりひめ』福音館書店

(11) ユリー・シュルヴィッツ作・絵／瀬田貞二訳 1977年『よあけ』福音館書店

(12) 中川李枝子作／大村百合子絵／1967年『ぐりとぐら』福音館書店

(13) ピアトリクス・ポター作・絵／石井桃子訳 1971年『ピーターラビットのおはなし』

ための評論集的なものとして『児童文学論』⁽¹⁴⁾ 上・下巻があります。いろんな雑誌にお書きになったものを集めたものです。なんとなく重くて鞆に入れられなくなったので持ってきませんでしたが、そこで瀬田さんはファンタジーとは一体何であるかということを、非常に分かりやすく語っていらっしゃいます。

ファンタジーですが、それまで日本では空想物語とか、お伽話という言葉でもって言われていたものです。それを瀬田さんがあるとき、そろそろファンタジーという言葉を使おうじゃないかと、ファンタジーという言葉は非常に厳密なものであって、ファンタジーはまず目に見えるようにすることから始まって、こういうふうに展開されているのだと、ある場所で講演なさいます。それは紀伊國屋での講演でしたが、つい最近、もうみなさんお読みになった方がいらっしゃるかもしれませんが、『子どもと文学』⁽¹⁵⁾ という本が復刻いたしました。元々1960年に刊行された本ですが、中央公論社から、それが品切れになって福音館書店から出していました。そして福音館書店でも品切れになって、今度は中公文庫でもって復刊しました。その付録に瀬田さんの非常に記念碑的な講演録が載っていますので、これはぜひお読みいただきたいと思います。そうか、ファンタジーとはこういうものだという基本がわかる仕組みになっています。

瀬田さんがファンタジーについて語っているついでに、もう一人石井桃子さんが子どもたちにとって昔話がどんなに大切なものかということも、紀伊國屋書店での講演で語られました。その二つが付録として載っていますので、文庫ですから安いですし、どうぞ手元に置いてください。

ついでにいいますと、この『子どもと文学』という本は、今のみなさんにはちょっと信じられないと思いますが、日本の子どもの本がいかにおかしい立場におかれているかということを、石井桃子さん、いぬいとみこさん、鈴木晋一さん、瀬田さん、松居直さん、渡辺茂男さんが集まって議論しながら語り合った、その記念すべき本で、当時大変物議を醸した本でもあるのです。そういう意味でも非常に面白いと思いますので、

(14) 瀬田貞二 2009年『児童文学論（上）（下）』福音館書店

(15) 石井桃子／いぬいとみこ／鈴木晋一／瀬田貞二／松居直／渡辺茂男 1960年『子どもと文学』中央公論社

お読みいただけるといいと思います。私は^{はたち}二十歳のときにこの本を読んでいます。

実はこの本の「あとがき」にも書いたのですが、なぜこの方々が大真面目で日本の創作を否定しようとしているのかよくわからなかったのです。この方々がまず否定したのは、小川未明と浜田広介と坪田譲治でした。どうしてわざわざ取り上げて、この三人を否定していったのか。つまり少年時代のことですが、私にとってこの三人の作品は、退屈で読むに堪えないものだったのです。大人の世界では子どもの本の書き手としてこの三人を高く評価する方もいらしたようです。それで我が家の本棚にも母が買ってきたのか、時々この三人の作品が並んでおりました。ちょっと目を通してみましたが、なんか湿っぽくて、なんか論理構成が弱くて、そもそもちっとも面白くない。それですぐにやめて、我が本箱から消えていったのです。それをどうしてこんなに大真面目で論じているのか。そういう日本の子どもの本の風土というのは、子どもにはよく理解できなかったからです。

そのころ既に「岩波少年文庫」が刊行されはじめていて、そこで私は面白いものにどんどん出会っていました。それに何といひましても、私は幼年時代、新潟の雪の中で祖母が毎晩のように、越後の昔話を聞かせてくれていました。その昔話の面白さに、毎晩本当にうっとりと聞き惚れていたものです。殊に、ほとんど戦時中、日本の貧しい時代、祖母はよく雪の降っている夜、火鉢に炭火をかんかんにおこしながら、長い火箸でもって灰をならし、そして秋に収穫した栗を爆ぜないようにちょっと傷を入れて、炭火の下に突っ込んで、そして昔話を語り始めました。長火鉢がここにあって、祖母の正面に妹がいて、右側に兄、左側に私が座って聞いていました。そして「あったてんがの」で始まって、最後は「じゃぼんとさげた」で終わる。日本の昔話、越後の昔話です。3話くらい語り終える頃になると、素敵な香りが部屋中に薫りはじめます。すると祖母は火箸でそれを取って、皮を剥いてふうふうと吹いて、3つの口にいれてくれるということが繰り返されていました。

私たちきょうだいは、たぶんそれが7時半ごろだったと思いますが、甘い栗をくちやくちや噛みながら、布団の中に潜り込んで今聴いたお話しのおもしろさと、それから栗の甘さを口の中で味わいながら眠りにつ

きます。当時は、夜も歯を磨きなさいなって野暮なことをいう人は一人もいなくて、朝だけ歯を磨けばいいことになっていました。だから、歯は今でも丈夫です(笑)。本当に楽しいひとときでした。それが、戦争が終わるまで、ずっと続いていました。今でもよく覚えています。戦争が終わる直前、わが家にほんの、ほんの少しのざらめのお砂糖が砂糖壺に残っている日がありました。それでお砂糖はおしまい。それで母がおしゃもじにそれをいれて、重曹をちょっと入れて、そうするとカメラが焼けるわけですね。こんな大きくなって。それを3つに割って、兄と妹と私の口に入れてくれました。兄と妹は本当に喜びながら、「こんなにおいしいもの食べたことない」と。当たり前ですよ。お砂糖なんて食べたことがありはしなかった。母が「惇夫はどう」と聞くので、なんとなく正直に言わないといけないと思い、「明日はお鍋で作って」と言ったのです。そしたら母がとたんにうわーと泣き出して、「戦争さえ終わったら、キャラメルって美味しいものがあるのよ、あめ玉ってものもあるんだから、バナナっておいしいものもあるんだからね」と、本当に生まれて初めて母が大声で泣くのを見たものですから、なにか母に対してものすごく失礼なことを言ったのかと思い、今でもちょっと傷に残っているのですが、まあいつか天国にいけたら、まず謝ろうと思っています。どうやら天国にいけそうもないので(笑)、永遠のすれ違いなのかもしれません。

瀬田貞二と「絵本」

瀬田さんはもうひとつ『絵本論』⁽¹⁶⁾ というものをお書きになります。それがこれですね。分厚い本です。お書きになるというよりは、実はあるとき岩波書店のいぬいとみこさんが、福音館に電話をかけてこられて、「今岩波にとっても面白い方が来ているから、ちょっと編集の責任者、来なさいよ」という電話をくださったのです。それで、松居直さんが若手の編集長だった頃に勇んで岩波にいてみると、そこにいらしたのが瀬田貞二さんだったのです。そして絵本に対する蘊蓄を語ってくださる。松居さんは興奮して福音館に帰ってきて、「もう大丈夫だ。瀬田貞二っていう絵本研究家がいらっしゃる、この人に従ってやればいい大丈夫

(16) 瀬田貞二 1985年『絵本論』福音館書店

だ』ということを大声で叫んだと当時の編集者が言っていました。その次の号からの『こどものとも』の折り込み付録に瀬田さんが絵本についてのいろはを書き始めてくださいます。それが、この『絵本論』の最初の3分の1くらいです。私たちが福音館書店に入ったときには、瀬田さんがその折り込みで書かれた文章をコピーにとって、みんなで読み合いながら勉強を続けていくのが、私たちの勉強の仕方でした。それほどまでに面白い本だと思います。

絵本とは一体何であるのか、絵本の絵というものはどう在らねばならないのか、絵本の文章はどうか、文体はどうか、子どもたちが本当に喜び、そして繰り返し、繰り返し読んでもらい続けてきた芸術としての絵本はどれかというようなことを、瀬田さんはずっと語り続けてくださったわけです。それまで絵本というのは単におもちゃと同じように、質の悪いおもちゃと同じように一度遊んで捨てられる、成長の過程でそれを捨てても構わないものだという意識がありました。そこで一挙に変わっていきます。絵本というものは、一生涯手元に置かなければいけないもの、それほど価値をもっていなければいけない、結婚するときにはそれを、お母さんやお父さんに読んでいただいた絵本を、また次の世代にも渡していかなければいけないものだという意識が、ようやくそこで生まれてくるわけです。瀬田さんの文章によって。これは大変な、日本にとって文化的な革命であったと思います。

それからもう1冊、これはお読みになった方が多いと思います、『幼い子の文学』、中央公論社から今でもロングセラーとして出ています。これが1980年、昭和55年かな、新書の形です。これは東京の日比谷図書館での講演録です。原稿用紙にして300枚ぐらいあったけれど、実はこの倍ぐらいのお話を東京都の図書館員の前で、瀬田さんはされています。『絵本論』と重複するものがあったので、半分に縮めて幼年童話ということを中心にして1冊にまとめ上げました。

実はそのとき、もちろんテープレコーダーなんてものはまだ普及していない時代でしたから、私はそっと速記者をその会の中に忍び込ませておきまして、速記者に瀬田さんのおっしゃることを全部書き取ってもらいました。月に一度2時間ほどの講義でした。本当に東京都の図書館員たち全員が集まるという、それほど盛況だったのです。瀬田貞二さん

に絵本の講義をしてほしいという声がものすごく多くて、私が瀬田さんのところにいって「是非お願いしたいという声ですので、お嫌でしょうが是非講義していただきたい」と申し上げたら、「わかりました、じゃあお引き受けいたします」ということで、講義が始まりました。その講義が本当に図書館員たちの心を打ちまして、さらにさらにその講義を続けてほしいという声が寄せられたのですが、結局その年の暮れに瀬田さんは吐血なされて、それが元で亡くなられたのです。

実は瀬田さんという方は、人前で話すことが大変苦手な方でした。本当にシャイな方で、一度瀬田さんの教え子が小学校の教師になられて、「お願いだから、恩師なんだから僕の学校に来て、絵本について語ってください」と言われて、瀬田さんがうっかり「わかりました」と言って、いざ保護者の前で絵本について、童話について語り始めたとなん、貧血になって倒れたそうです。それで医務室に連れて行かれて、ふと気がついて、だいぶ時間も経っているので「もうこれで帰っていいですよ」と言ったら、その担任の先生が「いえ、まだみなさん待っておられるので、ちゃんと最後まで話してから帰ってください」と言われて、最後までお話になったそうです。本当に文章に書くことに関して、あるいは大学で講義をすることに関しては、本当に準備万端整えてからなさる方だったからいいのですが、しかし人前でなんとなくフリーに話すことは大変苦手な方でした。

一度だけ、福音館書店で行っているセミナーに瀬田さんをお招きし、絵本について語っていただいたことがあります。目の前にいらしたのは保育者だけだったのですが、その日のテーマは、『三びきのこぶた』が日本でどんなふうで紹介されてきたかということでした。こういう机の上に『三びきのこぶた』を、日本で出されているもの、当時4、50冊あったと思いますが、それを積み重ねておきました。瀬田さんが講義しながら、この絵本はですねって、この絵本はですねって読み続ける。そのうちに3冊目ぐらいにいったら、「こんな絵本を日本で出版しているからダメなんだ!」とすごく怒りはじめて、舞台に叩きつけたのです。その怒りがあまりに激しくて、つまり文章も絵もこれでは子ども達に対して失礼じゃないかという言い方だったのですが、その激しさに保育者たちもみな驚き、司会をしていた私も驚きました。瀬田さんは冷静になって、そ

れでは本当に子どもたちに推薦できる絵本とは何か、『三びきのこぶた』とは何かということで、レズリー・ブルックの、今は『金のがちょうのほん』の中に入っていますが、その『三びきのこぶた』を紹介されました。そういう怒りもあって、人前で話すことはなかなか苦手な方だったのです。

この講義の速記録が出来上がって、瀬田さんにそれをお見せし、そしてこれをそのまま本にさせていただきますと申し上げたら、瀬田さんはびっくりして、まさかそういうスパイ（笑）が自分の講義に来ているとは思いませんでした。顔を真っ赤にされて、そのときも原稿をばんと投げ捨て、「人前でしゃべってしまったものなんて、とても原稿にできません」と、怒って怒って、こちらは企画を取り下げざるを得なかったのです。本当に変な話ですが、この『幼い子の文学』⁽¹⁷⁾は、瀬田さんがお亡くなりになってくださったおかげで、本にすることができました。そのときの速記録をもとにして、一周忌までに作り上げました。そういえばこの『絵本論』にしても、それから『児童文学論』にしても、自分が雑誌に書いたもの、月刊誌に書いたもの、あるいは折り込みに書いたものだからと、何度お願いしても本にすることはやめてくださいと言われました。「やっぱり不正確なところがある、子どもたちに対してまだまだわかっていないことがある、だからそれだけはやめてください」と言い続けて亡くなられました。だから瀬田さんの著書のほとんどは、亡くなってから著者の了解を得ないで本にしているということになります。

1冊だけ、これも重くて持ってこなかったのですが、『落穂ひろい』⁽¹⁸⁾という本がございます。それだけは、『母の友』に連載されたときから、本にするという意図のもとで書き続けられました。これは日本の文化、子どものための文化、特に絵本というものが、明治以前にはどんなふうに関心したのか、本当に子どもたちのための本を出版しようと志した大人が、日本にいたのかどうか探りあてていくという、そういう途方もない企てだったのです。それを瀬田さんが全国を旅行なさりながら、あるいは古い図書館を覗きながら、あるいは民家を訪ねながら、探究され続

(17) 瀬田貞二 1980年『幼い子の文学』中央公論新社

(18) 瀬田貞二 1982年『落穂ひろい（上）（下）』福音館書店

けました。そしてやっと原稿を書き終わり、これからさらに確かめの旅に出ようかという矢先に病気で倒れられて、ついにそれができなかつた。でも、荒木田隆子さんという編集者がずっとついて一緒に仕事していましたので、それは1冊の本にまとめあげることができました。これもおそらくこの学校の図書館にはあると思いますので、『落穂ひろい』をぜひ一度読んでいただきたいと思います。

石井桃子さんの場合

それから石井桃子さんも、人前でお話することが嫌いなタイプでいらっしゃいました。ただ石井さんも図書館員から依頼があった場合、なるべくお話するとおっしゃっていました。特にアメリカで学ばれた図書館の在り方とか、図書館と子どもの本のそれからとか、編集者と子どもとの関係など、要するに子どもの本の普及の問題、子どもの本の質を維持していく問題、あるいは高め合っていく場所としての図書館にはどうしても伝えたいってことがあるということで、図書館活動には力を注いでおられたようです。

当たり前のことですがけれども、作家はものを書く。詩人は詩を作る。編集者はそれを見つけて、あるいは書いていただいて、ひとつの本にしようとする。そして出版される。しかし、図書館員はそういう本を客観的に見ながら、というか子どもと出版社の間に入って、それを静かに読みながらこんなふうに考えるのです。その本が本当に子どもたちの今にとって喜びを与えるか。子どもたちの未来、子どもたちがこの本と接することによってまた次の読書へそそられるような、そのレベルまでいつているか。この本の挿絵を見ることが、子どもたちが絵を見るという喜びに浸ることができるか。絵本の場合、絵が大人の目から見ても十分に芸術として通用するくらいの絵が描かれているかどうか。それから、一枚絵とは違って、額縁に飾る絵とは違って、物語を語っているかどうか。日本の絵巻物と同じような理屈ですよ。読んでほしいと願うほどまでに、そこにユーモアだとか、やさしさだとか、たのしさだとか、面白さがきちんと蔓延しているかどうか。そのことをちゃんと確かめていくのが図書館員の仕事です。

出版社があり、出版社は利益を追求しなければいけない。図書館はや

はり質を確かめなければいけない。それぞれが違った仕事があるわけですから、その図書館員の育成のために、瀬田さんと石井さん、お二人は尽力なさいました。

特に、石井さんは「岩波少年文庫」の編集者を3年やられたあと、突然ロックフェラー財団がお金を出して渡米されました。日本に大変優れた編集者がいるということがわかりまして、その人をアメリカに招くわけです。一緒に戦後のアメリカの子どもたちのために、日本の子どもたちのために、世界中の子どもたちのために、これからの子どもの本がどういう質を持つべきで、どういう質を必要とするかということを討議し合おうということです。石井さんはもう40代を迎えられていたのですが、「ちょっと私はもう」とおっしゃっていたのですが、たってのお願いということで、3年で岩波の少年文庫の編集をお辞めになり、アメリカに旅立られることになりました。そのあとをお継ぎになるのが、いぬいとみこさんです。

横浜の港で石井さんを送っていた、一人の10歳位下の男性がいて、石井さんに、「石井さんは少年文庫の編集を本当に一途にやってこられたけれども、なんとか絵本の方もいっぱい研究してきてください、見てきてください」と石井さんに耳打ちいたします。石井さん、「でも私はやっぱり高学年ものの方があっているような感じがするので、できるかどうかわかりません」と言って、アメリカに向かわれます。ところがアメリカにいてみると、まさしくアメリカの絵本の黄金時代が始まっています。みなさんのお好きな、バージニア・リー・バートンだとか。彼女はどんどん、どんどん絵本を描いているところでした。その他マリー・ホール・エッツだとか。いろんな方々が、特にヨーロッパから、戦火を逃れてきた人たちが多かったのですが、そういう人たちが活躍しています。目が洗われるような形でもって石井さんは、絵本の研究にも勤しむわけです。

それと同時に、図書館とはどんなすごいところであるか、そういうことも身を持って体験なさることになります。石井さんの著作集はいろいろ出ておりますので、その中にも書いてあることですが、読んでいただきたいと思います。

瀬田貞二さんのところには、石井さんからのお手紙がどんどんとどき

ます。一方、瀬田さんは、アメリカ軍が日本から帰っていくというときに、東京の神田の古本街にたくさんの子どもの本を放出して、というかアメリカまで持って帰れないものだから置いて帰っていきます。それを片っ端から、二束三文でといたらいいでしょうか、買って、買って、買って、そして、1冊1冊吟味していくことになります。それから何十年か経って、私なんか瀬田さんの文庫にお伺いするようになって、その中から本当におもしろい絵本を福音館で翻訳出版させていただくということになっていくわけです。だから瀬田さんはアメリカ軍が放出したものを、およびアメリカ人の書いた評論などを読みながら、石井さんは実際にアメリカで、このお二人が中心となって、日本の子どもの本の誕生を告げていくことになっていくのです。

『落穂ひろい』と荒木田隆子『子どもの本のよあけ』

『落穂ひろい』に戻りますが、編集した荒木田さんのことです。書き手の瀬田さんが亡くなっても本にしたいという思いから、瀬田さんがたどられたところ、それから書類に全部目を通して、『落穂ひろい』の完成のために編集者生活が続けられました。やがて完成してみると、随分多くの読者から、いろんな江戸時代、江戸以前の資料というものが本に載っていたけれども、とても理解できないので何度か来て講演会をしてほしいと頼まれました。そこで休みの日だけそういう方々の前で少しずつ講演するようになっていった。それが評判を呼んでやがて東京子ども図書館で1年間にわたって、『落穂ひろい』を中心にして、瀬田貞二さんについて語るようになりました。そしてそれがあまりに評判がよかったものですから、『子どもの本のよあけ』⁽¹⁹⁾という本を出しました。それがこれです。

一人の女性の編集者が、見た、編集した、そして感じた瀬田貞二という人の記録ですが、評伝と言っていると思います。評伝と言っているほどの、素敵な質になっていますので、ぜひこれも読んでいただきたいと思っています。

時々、『子どもの本のよあけ』の中で、自分が編集者をしていたころに自分の席の後ろでうるさい男が二人、けん玉をして遊んだり、すもうを

(19) 荒木田隆子 2017年『子どもの本のよあけ－瀬田貞二伝』福音館書店

して遊んだりしたなんてことまで書かれていまして、それが私と藪内正幸君なんで（笑）、そんなことまで書かなくてもいいのにとっています。そんなことも含めて、おかしなところもありますので読んでください。プロフェッショナルな編集者というものは、どういうものであるかということを感じられることができるだろうと思っています。

『児童百科事典』の編集

瀬田さんがされたお仕事の中で、今まで言ってきたのはほとんどみなさんが手に取ってご覧になることができますが、ひとつだけ、非常に目にするのが不可能に近いものがあります。それが、『児童百科事典』です。

私がかねがね日本の戦後の子どもの本というのは、石井桃子さんの編集した「岩波少年文庫」という特に物語、フィクションを中心としたものの、それと瀬田さんがすぐ後にお出しになった『児童百科事典』というノンフィクション部門でもって、支えられてきたと思います。戦争によって、それから戦前からのいろんな考えもあって、子どもの本というのがちょっといびつな発達をしていたわが国の中で、ようやく瓦礫の山を整理して、そこを見事な野原に変えようとしたという動きが、「岩波少年文庫」と『児童百科事典』だったと思っています。今、みなさんが思っ
てらっしゃるよりもはるかに多くの読者が『児童百科事典』を読み、真実は何かということ子どもながらに考えるということを繰り返していくことになったのです。それがこれですが、全部で24巻あります。

瀬田貞二さんは、東京大学出身で俳句の研究者でもありました。だからときどき瀬田さんの翻訳を読むと俳句の言葉が出てくることを経験されて、「あれっ」と思われたこともあるでしょう。瀬田さんは芭蕉の研究者です。一方、子どもの頃にいろんな素敵な物語を読んでいらしたので、どうしても子どもの文学をやりたいと思って、まずは教師になられます。しかし戦争が始まって、子どもたちは戦争に駆り出されていく。戦争にいく子どもたちをみながら、どういう教育が可能なのかということに悩みながら、苦しみ悶えるわけです。全部大人がやってしまった戦争の苦しみを子どもたち自身が受けていくことになった。そして戦争が終わった。その中で瀬田さんは、教師の生活に戻ってはみたものの、文部

省がこれからの戦後の教育ということで戦前にはみられなかったような、教育を劣化させていくような、レベルの低い教育をやろうしているということが、見え見えになってくるわけです。それはアメリカ軍の干渉でもあったわけですが、瀬田さんはこれに怒りを発しました。教育というものは民間からでもできる、必ずしも教科書に頼らなくてもいいのだということで、絶対に百科事典を作ってやろうと決意されます。子どもたちはそれさえ読めば、子どもたちを勇気づけ、真実に目覚めさせ、そして世界に対して澄んだ目でもって、それを見渡すことのできる、そういう百科事典を作ろうということで秘策を練り始めます。いろんな知人たちを頼り、それからまた絵描きを頼り、その輪をどんどん広げていきます。

その矢先、平凡社では中学生のための百科事典を作っていました。そこで、平凡社の百科事典を作っている方が、実は瀬田さんの旧制高校時代の友達の日高六郎さんでした。ある年齢以上の方は名前を覚えていらっしゃるかもしれませんが、60年安保闘争のころのリーダーのお一人でもあったのです。その日高さんが平凡社の社長と話しているとき、「できれば小学生向けの百科事典を作ってみたいんだ、誰かいい人知らないか」と言われた時に、日高さんが「瀬田貞二っていうすごく面白い人がいるから、その人にやってもらおうじゃないか」ということになり、すぐ瀬田さんは平凡社に呼び寄せられました。瀬田さんの企画を平凡社が聞いて、「それならば、絶対平凡社でやりましょう」ということになり、企画が決定します。

そんなある日のことですが、岩波書店から一通の手紙が平凡社に届きます。これから日本の小中学生のために「岩波少年文庫」という新しい企画を考えている。いろんな物語を、世界の一流の物語を子どもたちのために発行しようと企画が持ち上がっているから、平凡社からもどなたか優れた子どもの本を知っている方に回答をお願いしてくださいというものでした。日高六郎さんのところにその手紙がきました。当時日高六郎さんはもう社会学者として有名だったのです。日高さんはそれをごらんになって、「あっ、これは瀬田君の仕事だよ」と、瀬田さんに渡します。岩波が選んだ知識人というと、その時500名いたのですが、その500名おのおのにアンケートを配ったわけです。そしてどんどん、どんどん、

返事は舞い戻ってきた。みなさんが知っていらっしゃるような、イソップだとか、グリムの昔話だとか、『親をたずねて三千里』だとか、『小公女』『小公子』の類が、ちょっと古めの物語だけがそこに記されることになります。

ところが一通だけ、担当していた石井桃子さんのところに、見たことのない字で、それこそ今アメリカで新たに読まれている物語がハガキいっぱい書き記された、そういうハガキが戻って参ります。石井さんはびっくりします。ご自分がアメリカのリストでもって調べあげてきたそういう本のタイトルが、全部そっくりそのままそのハガキの中に収められている。もちろん、『エルマーのぼうけん』なんかも入っているわけですが、それを見て石井さんはびっくりなさいます。一体これは誰だということで、平凡社に電話します。瀬田貞二という方にお話したいと言いましたら、瀬田さんが直接出られて、「私が瀬田ですけど」とおっしゃった。「実は瀬田さんの書かれたリストは本当にすごい、だからこれから平凡社に伺いたい」と石井さんがおっしゃると、「いやいや僕の方から伺います」と言って、瀬田さんが岩波においでになる。それが1950年だったはずです。そして、瀬田さんもまた古本屋からいっぱい買ってきた童話を読んでいるわけですね。プラス、アメリカの評論も既に読んでいた。石井さんはそれに感動しまして、是非ぜひ「岩波少年文庫」を手伝っていただきたいとおっしゃったら、瀬田さんが「でも私は『児童百科事典』を始めたところだから、お手伝いはできないけれども、いくらでも何かあったら、助っ人として参ります」とおっしゃった。その直後に、「岩波少年文庫」の刊行が始まっていくわけです。そして少し経って、この『児童百科事典』が刊行されるという順序になっていきます。二つの、戦後を飾る大きな出版がそこで成されるわけです。

『児童百科事典』にみる瀬田さんの思い

もしも、こちらの図書館にまだ在庫としてあったら、ちょっと読んでいただきたいと思うのがこの百科事典になります。例えば、「河童」という項目をご覧になりますと、もちろん「かっぱ」に関する民俗学的描写が、柳田國男説を中心に、ずーっと子ども向けにわかりやすく書かれている。瀬田さんがリライトするわけです。それだけだったら、まあいい

のですが、最後に一言、「河童は今でも生きている」という言葉で書き終えているのですよね。これはまあ何という表現だろうと、当時の中学生だった私などは思います。河童は生きていると言っても、生きてるわけないだろうという思いですよ。でも瀬田さんのところにあとで伺ったら、当時編集者だった上村さんという若い女性の方がいらして、「いくらなんでも編集長、河童が生きているなんておかしいんじゃないですか、百科事典に。だから削りましょうよ」と言うと、瀬田さんが平然として「生きているものは生きているんですから」と言って削ることを拒否したと伺っています。そういう百科事典だったわけですよ。これは子どもたちにとって何が真実か、いやいや人間にとって本当のものってどういうことなのだろうかということを、瀬田さんが子どもたちに伝えたいものが全部、24巻の中に収まっている百科事典だったわけです。

最近になって、数年前に、例えばポプラ社からやはり百科事典が出ていますが、「河童」という項目をご覧になりますと、どれほど質的な違いがあるかということを、改めてみなさんはお感じになるだろうと思います。

中学生のときに、「河童は生きてるもんか、これは冗談だろう」と思っていた私自身も、だんだん年を経るにしたがってこんな体験をしました。瀬田さんが図書館員相手に講演会を終えて吐血なさって、いよいよ危ないという二日前の日、さっきの荒木田隆子さんと一緒に瀬田さんの病室にお見舞いに伺ってからのことです。

実はその数年前に瀬田さんは、大作の物語、お読みになった方もいらっしゃると思いますが、『指輪物語』をずっと訳していってらっしゃった。たいそう疲れてもいらしたのですが、その時になんとなく「大丈夫ですか」と伺ったら、「実はね、斎藤さん、信州の仕事場で翻訳をしていると、裏の山道をよくおじいさんが、炭焼きのおじいさんが炭を焼きに山を登っていく。その人に会おうんだけどね、そのとき、最近のことなんだけれども、そのおじいさんが、どうやら炭焼きに身をやつした天狗のように思えてしかたがないんですよ」と、おっしゃり始めたのです。これはもう編集者としてはしめたと思います。あっ、瀬田さんがいよいよあの大作のあとに、今度は創作で日本の神話と日本の昔話と日本の妖怪たちを全部登場させながら、新しい本格的なファンタジーをお書きにな

ろうとしている兆候だと思いました。瀬田さんご自身もいつかその天狗の話を書いてみたいとおっしゃっていたのです。それから事あるごとに天狗の話はまだですかと繰り返し、繰り返し申し上げていたのです。

そしてお亡くなりになる二日前に瀬田さんのところにお訪ねして、「瀬田さん、もう危ないって話聞いて来たんで、そんなことおっしゃっては困りますって、あの天狗の話をちゃんと書いてから、亡くなってください」と正直に申し上げました。「子どもたちが待ってるんですから。日本ではまだ生まれていない、ファンタジーなんです。ピュアファンタジーと言われているものなんです」と申し上げたら、瀬田さんが静かに、「しかし、日本の自然はもうほとんど消えかけてきた。天狗が住んでいた山々は、もう杉と檜に埋もれてしまったような感じがする。だからもう河童も天狗も書けないですよ」と。そして、ニコッとお笑いになったと思ったら、「斎藤さん、このアイデアは斎藤さんに譲るから」とおっしゃって、口を閉じられてしまったのです。「冗談じゃありませんよ、僕は河童や天狗には、さほど興味はありませんから」と申し上げたのですけれども、亡くなられてしまった。

残されたこちらの方は困ります。懸命になって、『絵本論』とか、『幼い子の文学』とか『児童文学論』の編集をしていたからいいのですが、それが終わって、「はて何したらいいんだ」というときに、ふとその瀬田さんの言葉を思い出しまして、僕の少年時代には河童も天狗もそろそろいなくなりかかっていたということを思いながら、ところがなんとなく気になって、田舎に帰ったりする度に、河童や天狗というものが本当に気になって、それから少しずつ、少しずつ、自分の心の中で大きくなってきて、先生が亡くなられてから四十年近く経ってから、ようやく「河童のユウタの物語」⁽²⁰⁾を書くことができた。つまり中学生の頃に「ふんっ、これはやっぱりあまりよくない、創作で生きているなんて」と思っていた人の言葉が、死の間際の言葉を通じて、私の心にもやはりずんと響いて、結局書く羽目になってしまったということです。その物語の中では最後の方で、瀬田さんご夫妻と河童が出会うところまで書いてしまった。それで書きながら、ちょっと興奮しながら、亡くなってしまった方と物語の中で再会する喜びということまで書いたりしたので

(20) 斎藤惇夫 2017年『河童のユウタの冒険』上・下、福音館書店

す。物語を書くということは本当に不思議なことです。

河合隼雄さんの思い出

不思議なことと言えば、今突然思い出したのですが、心理学者の河合隼雄さんという方がいらっしゃいました。河合さんと小樽でファンタジー大賞の選考会というのをやっていた時のことです。僕が朝食を食べようと思ってホテルの食堂に行きましたら、そこに河合さんだけが一人いらっしゃいました。河合さんと二人でお話しているうちに、突然、いつも冷静な物言いの河合さんが顔をぱっと赤らめたと思ったら、「斎藤さん、実はですな」と。「何ですか」と言ったら、「私も物語を書き始めたんや」とおっしゃったのです。「えっ、河合さん、お書きになり始めたんですか」、「そうなんや、ある雑誌社に頼まれて、子どもの頃のことを書けと言われて、書き始めてみたんです。いやできるかどうかは、わかりませんけれどね」と。「おもしろそうだから、なさったらどうですか。何書くんですか」、「子どもの頃のことを書きたい、子どもの頃、自分がどんなに泣き虫であったかってことを、それだけを書きたい」、「そうですか」。

河合さんは、「だけど書こうとすると、子どもの頃の目の周りの風景だとか、家並みだとか、そういう姿が全然記憶に残っていないってことがはっきりしまして、私の記憶に残ってるのは、誰となんという会話をしたかということだけが鮮明に残っているんです」とおっしゃるのです。「へえ、心理学者ってそんなもんかな」と思いながら、「それ、おもしろいじゃないですか、ぜひお書きになるといいですよ」と言って、その時は別れたのです。

そうしましたら、その年の12月の末、12月の31日です。突然、FAX が送られてきました。出どころはどこかっていいますと、文化庁長官室です。「何だこれは」と思って読み始めますと、河合さんからです。第一回の連載を書き終えましたから読んでくださいとありました。読みますと「泣き虫ハァちゃん」⁽²¹⁾の第一章が書かれている。自分のことをみんなに「はあちゃん」と言われていて、本当に泣き虫だった。しかし時代としては、男の子は泣いてはいけないという時代です。そういうふうな教

(21) 河合隼雄 2007年『泣き虫ハァちゃん』新潮社

育はうけてきた。でもある日、突然結婚でいなくなると知った担任の先生が、「私はこれから結婚するので、もう園の先生は辞めますよ」と言ったとたんに、河合少年が泣き出したそうです。「うわー」、泣いて、泣いて泣いて、家まで帰ってまだ泣いていたと。それで、お母ちゃんが「何で泣いてんの」と聞いて、「先生がいなくなっちゃう」と。そしたらお母さんが隼雄少年をしっかりと抱きしめて、「泣きたい時には泣いてもええんよ」と、いっぱい泣かせてくれたというオチなのです。そのことを第1回の原稿としてお書きになっていた。それが非常にうまくできていて、私はちょっと感動いたしまして、すぐにFAXを打ち返しました。「おもしろいです、これで2号からも読めると思いますので、このまま続けてください」と送ったら、すぐに電話がかかってきました。河合さんから、文化庁長官室からです。「本当におもしろいですか」、「おもしろいです」、「兄の雅雄の少年動物史みたいな文才は自分にはないんだけど、でも思い切って書いてみようと思いました」、「ぜひ、そうなさってください。これは本当に心ある人たちにとっては、素敵な作品になると思いますから」というようなことを言いましたら、河合さんが、それまで物語を書いたり、それから絵を描いたりする人たちが、どんなに自分と違う才能を持っているかということを、心理学者としてずっと語ってきたけれど、そんなものを全然無視して自分もまた書くことによって、自分の少年時代の記憶が、少年時代に向き合っていた世界、宇宙がようやく、しかと見えてきたということを、ずっと話されるわけです。

「そんなことは、河合先生は既に何回も書いていらっしゃるじゃないですか」と何回も言いたくなったのですが、はじめて物語を書くところに身をおかれた方が、本当に嬉しそうにしてそれを語り続けて…。でも途中でお亡くなりになってしまいましたよね。だから、ちょっと未完成の作品ではあるのですが、河合さんにも、そんな経験があったのです。瀬田さんは少しシャイな方ですから、物語というものに何回か挑まれたのですが、それほど多くは残っていません。

瀬田貞二さんとファンタジー

瀬田さんは、先ほどお話ししたようにして亡くなられたのですが、ファンタジーとはいったい何であるのかということを、瀬田さんが紀伊

國屋ホールでなされた講演を読んでいただくとわかると思います。瀬田さんがなぜ『ナルニア国ものがたり』を翻訳なさったか、それから『ホビットの冒険』⁽²²⁾をなぜあんなに夢中になってお読しになったか、『指輪物語』も含めてですが、それがよくおわかりになるだろうと思います。ファンタジーにはいろんな種類がありますが、瀬田さんが目指されたのはあくまで、やはり本格的なファンタジー、ピュアファンタジーと言われているものです。魔法が中心となっているファンタジー。そしてそのことは実は、「河童は、いや天狗は生きているんだ」と昔々言い切られた、大変優秀な編集者の言葉そのものも全部そこに通じていくのだということ、そのことが改めて認識されるだろうと思います。

瀬田さんという方は、シャイな方だと思いましたが、時々怒ったりする短気なところもありました。子どもたちが大好きな方でした。そしてご自分が少年時代に、いろいろ近所の子どもたちの家で読ませてもらった文学、「アルスの児童文庫」というのがあったのですが、これが、北原白秋が編集した本です。それから「小学生全集」、これは菊池寛が中心となって編集していた世界中の物語集でもありました。このふたつを中心にして瀬田さんはその中で読んだ面白い物語を読み耽っていました。物語を読み耽っていたときの、やはり自分の心の中が一番豊かに広がっていたことを、本当に熟知していた方でした。

芭蕉を研究し、その研究者としてもいい論文を書いておられたのですが、やはり戦争というものを経て、何としても子どもたちに、ご自分が楽しかったころの、その物語の世界を、そして物語を通して世界を感じていくことの、その楽しさと大変さというものを、やはり心から味わってほしいということ、そのことを一生の課題として生きてこられた方でした。

『子どもと文学』の中で、瀬田さんが担当されていたのが、宮沢賢治の一章でした。先ほど申しましたように日本の古くからの（児童）作家を否定しましたが、宮沢賢治はすごいということをおっしゃっていた。たぶん最初の論文だろうと思いますが、とてもよくできていると思います。これもお読みになったらいいいと思います。

実は私の小学校時代の担任が、本当に宮沢賢治が好きな方で、その先

(22) J.R.R. トルーキン / 瀬田貞二訳 2002年『ホビットの冒険』

生のおっしゃることと、瀬田さんがおっしゃることが重複したものですから、私は嬉しくて堪らずに、この『子どもと文学』という本が大好きになったのです。

翻訳家としての仕事

瀬田さんは石井さんと一緒にリリアン・スミスの『児童文学論』⁽²³⁾を訳されました。図書館員たちにとっては聖書と言われている本ですね。トロントの図書館員だったスミスさんが書いた『児童文学論』です。スミスさんは石井さんの姉弟子でもあるのですが、あらゆるジャンルに渡って語られている本です。そして、この本を書いたきっかけとなっているのが、『本・こども・大人』、ポール・アザールというフランスの比較文学者の本ですが、これも翻訳されています。

瀬田さんにこれからの編集者は何から勉強したいですかと尋ねたときに、スミスの『児童文学論』とアザールの『本・子ども・大人』⁽²⁴⁾と、そしてもう1冊、アン・キャロル・ムーアって人がいるんですが、その人図書館員ですね、アメリカの、1番最初の、その人の書いた『My Roads to Childhood』⁽²⁵⁾、「子ども時代への私の道」と言えばいいでしょうか、いろんなリストだとか、子どもの本とは何かということが研究所として記されていた本です。この3冊をともかく読むことが編集者としてのスタートではあるまいかと瀬田さんはおっしゃっていました。偶然、その頃私の兄がアメリカに留学してまして、福音館に入っすぐ兄に手紙を書きました。編集者になることができそうだと、何から読んだらいいかすぐに近くの図書館に聞いてくれと言ったら、やはりこの3冊を紹介して送ってくれました。本当にもうだいたい古い本になっていますけれども、やっぱり瀬田さんが紹介してくださったとおりだと思っています。

瀬田さんが紹介してくださった絵本、幼稚園ではいつも私が読まされている絵本、それから瀬田さんが訳してくださった本、ホビットもナルニアも含めて全部、やはり子どもたちの古典となっていること、子ども

(23) リリアン・H. スミス / 石井桃子・瀬田貞二・渡辺茂男訳 1969年『児童文学論』

(24) ポール・アザール / 矢崎源九郎・横山正矢訳 1986年『本・子ども・大人』

(25) Anne Carroll Moore、1920、My Roads to Childhood: Views and Reviews of Children's Book

たちにとっては繰り返し、大きくなりながらも読み続ける本だということです。「子どもの本は文学でなければいけない」というのが、ポール・アザールの言葉ですが、文学であらねばならないということ、文学であることは結局子どもたちの成長にとって、優れた文章、優れた物語、優れたファンタジーというものがどんなに大切かということ、63年間の生涯の中で言い続けられた、それが瀬田貞二さんという方のご生涯であったように思います。

今を生きる子どもたちに必要なもの

今、子どもたちを取り巻いているのは、もうみなさんが考えていらっしゃるよりもはるかにネットの世界ですね。ネットの世界に子どもたちは取り巻かれてしまっています。特に私の住んでいる浦和なんて、小学校に入ったとたんにもうタブレットを与えられて、自分の健康状態をぱっと打って学校に提出してというところから始まっています。北欧の教育の中で、小学校の低学年にはネットは使わせないという方向にいったというニュースは、ご存じだと思います。しかし日本は逆方向に来了しまった。その結果、子どもたちは、その延長としてのスマホも増えまして、YouTube ももちろんそうですが、それなしには済ませられないような小学校の中学年、高学年ということになってしまった。子どもたちが本当に成長させなければいけない、大脳皮質だと大脳白質といわれているものが、本当は50cc の重さがなければいけないのに、全然成長してない。それがほとんどネットのせいであるということまでわかってきました。特に大変なのは、子どもたちが人間にしろ、それから自然にしろ、実体験が本当に薄くなってしまったということです。どうやって子どもたちの実体験を深めていくのか、どうやって子どもたちに本当の実体験をさせるように仕向けていったらいいのか、今みなさんも含めて私たちを取り巻いている一番の問題だろうと思います。

そのために私たちに何ができるかと言ったときに、やはり瀬田貞二さんの歩いてこられた道というのは、私たちにとってひとつの大きな礎になるだろう、参考資料になるだろうと思っています。一人の作家を知ること、その人の全作品を読むことだと小林秀雄が言っていました。瀬田貞二という方を知るためにはやはり、瀬田貞二さんが訳されたもの、

お書きになったもの、それらを全部読むことなのだろうと思います。大した数があるわけではありませんので、ぜひもう一度きちんと目を通してみてください。

『よあけ』という絵本が私はとても好きです。荒木田隆子さんも書いてらっしゃいますが、偶然東京の丸善という本屋で原書を見つけ、瀬田さんのところに持っていきましたら、その日のうちに訳してくださって、すぐに本になった本です。私の息子が脱水症になって、小学校一年のときに、水一滴、ご飯一粒も食べられなくなったときに、この『よあけ』が出されたばかりで、この本を持って病院にいきました。点滴を受けているので縛られていたのですが、息子に読んでやったら一言、「僕を自然の中に連れてってよ！」と叫んで、そしてそのまま回復していきました。

中国の柳宗元という詩人の大変有名な詩をアメリカの絵描きが気に入って本を出した。それを日本の瀬田さんが気に入って、「ああ、ようやく西洋と東洋と、日本とこうみんな一緒になったような自然というものがどんなに人間にとって大切なものかということ、子どもたちのところにそっと伝えられるような作品が出た」とおっしゃり、すぐ訳してくださった。私はこの訳文を読んだ時に、瀬田さん思いの深さを深く感じる事ができたので、これもぜひもう一度読んでいただけたらと思います。

ということで、瀬田さんに対する思いをまだ伝えきれないところがあるのですけれども、どうぞ、残り時間少ないと思いますが、何でもよろしいですから、質問してくだされば、わかる限りお答えしたいと思います。

〔この後フロアからの質問にお答えいただいた。〕

〔質問〕 齋藤先生は編集者として、古典といわれるような何世代にも渡って読み継がれる絵本やファンタジーと、新しいファンタジーというものにも常に接してこられたと思うのですが、将来というか今後、未来の話なのですが、また新しいファンタジーというものは生まれて、求められていくと思われるのでしょうか。古典と新作という対比の視点からお考えをお伺いしたいです。

〔回答〕それは、毎日、毎日考えている問題で、まだ結論が出ていません（笑）。これからも考え続けていきますというお答えで許してください。

僕は、瀬田さんと女性では長谷川摂子さんがお書きになれるんじゃないかと思っていたんです。長谷川摂子さんは出雲育ちの方で、日本の神話を中心として、ファンタジー、今の日本に通じるファンタジーをお書きになる資質を持った方だと思いました。ご執筆をせっついていましたが、病気にお倒れになって、それが不可能になってしまった。これから書ける方がいらっしゃるかな、まだ分かりません。（質問者を指して）どうぞ、お書きください。

司会：斎藤先生、どうもありがとうございました。瀬田貞二さんの遺志が斎藤先生の中にずっと生き続けていらっしゃるがよくわかりました。現代の子どもたちを取り巻くスマホやタブレットを使ったネット環境の問題についても、子どもたちが大好きな斎藤先生のお考えは、こういう瀬田貞二さん、石井桃子さんや中川理枝子さんの精神を引き継がれています。とても心に染み渡る貴重なお話をしていただきました。本当にありがとうございました。（了）

（児童文学作家・研究者）